

邪馬台国の時代⑧  
～伊都国から奴国へ～

河村哲夫

古代人のコース

前号において未盧国から伊都国へのコースについて検討したが、次に伊都国(糸島市)から奴国(福岡市・那珂川市・春日市・大野城市・太宰府市など)へのコースについて検討してみよう。

なお、本シリーズにおいては、倭人伝のクニグニの比定地について、下表を前提に議論を進めていることを念のために申し添えておきたい。

この比定地をみだりに動かすことは、九州在住の筆者としては禁断の一手とみている。

国名	比定地	関連地名
対馬国	対馬	
一大国 (一支国の誤り)	巻岐	石田郡・石田郷の「石(いし)」
未盧国	唐津を中心とした松浦郡	松浦川
伊都国	糸島市のうち旧怡土郡	
奴国	福岡市・那珂川市・春日市・大野城市・ 太宰府市など	那珂川 那の津
不弥国	宇美町を中心とした糟屋郡	宇美川

伊都国から奴国への距離・方角について、『魏志倭人伝』には、

「(伊都国より)東南して奴国に至る。百里なり」

と書かれている。

ちなみに、古代人のコースの基本的な考え方について、『季刊古代史ネット』第 6 号の「巻頭言」で次のように記したことがある。

「神功皇后の伝承地に沿って歩いていくと、下流の広い川を渡ることを避けるように、川に沿って上流にまで上って、山沿いの道をたどって峠を越え、そして、次の川伝いに川下に下りていくのである。そのようなコースに伝承が点々と残されている。

——なんで歩きやすい平地をまっすぐ歩かないのだろうか。

現代人の常識では考えられないコースで、地図を見ながら何度も首をひねったものである。

ところが、何度かそのコースを歩くと、その理由がわかった。

川に沿って歩くと、意外と勾配がなだらかで、上りも下りも楽々と心地よいのである。

峠にたどり着くと、風景を一望することができる。

地図もナビゲーションもない時代には、高い場所からの眺望が地図の役割を果たしていたことが実感できた。

車を運転し、電車やバスに乗って、大きな河川に架けられた橋を楽々と進む現代人には見えない世界である。

古代においては、平野部には堤防のない大きな河川が流れ、あちこちに沼や湿地が広がり、草木が生い茂り、獣や害虫も多かったであろう。

雨季にはしばしば洪水にも襲われ、古代人にとって、平地はまさに危険地帯であった。

古代人は、安全な丘陵地や微高地を選んで居住し、時間をかけて、用心深く、少しずつ低地の開墾を進めていったにちがいない。

そういった古代のイメージを感じられるようになった」

このことは、『魏志倭人伝』の帯方郡の使者たちの行程を考える場合にも当てはまる。

現代人にとって、ごく当たり前のコースであっても、いったんそれから離れて、古代の地形と古代人の暮らしに思いを馳せなければならない。

現在、長崎市・佐世保市・唐津市・糸島市・福岡市を結ぶ国道 202 号が北側の臨海部を走っているが、これは戦後重点的に整備された一般国道であり、古代人のルートとはほとんど関係がない。

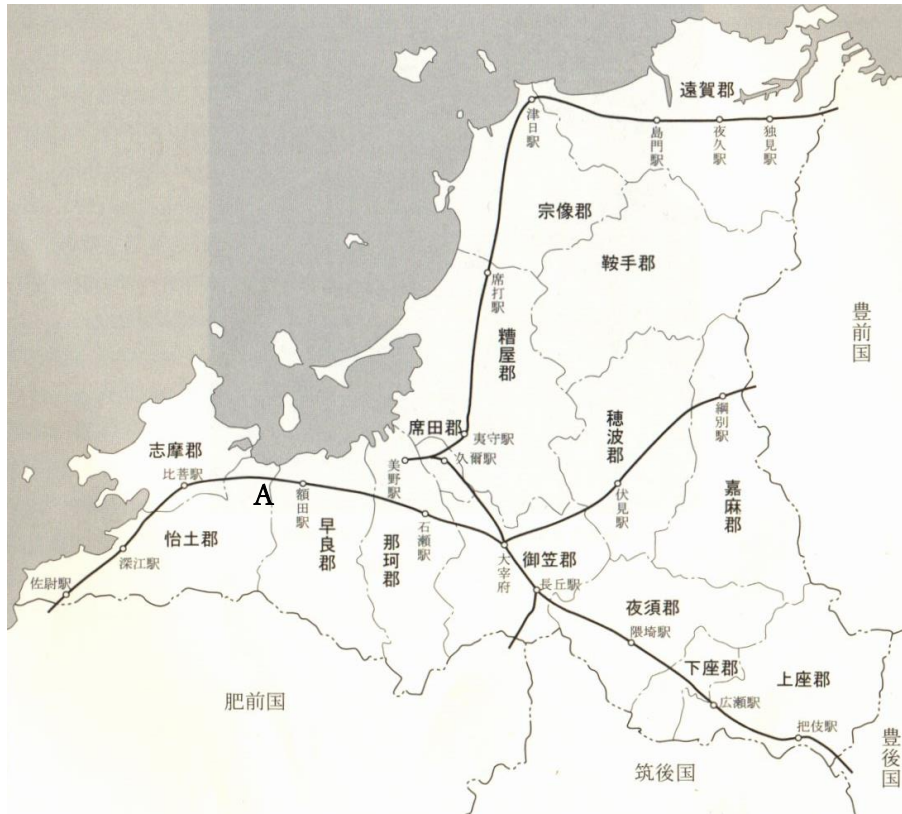


### 江戸時代の唐津街道

江戸時代の唐津街道についても、近世の街並みや集落を土台に基本的に参勤交代用の基幹道として整備されたものであり、古代人のルートとたまたま一部重複する部分はあるにせよ、相互の関係はきわめて希薄である。





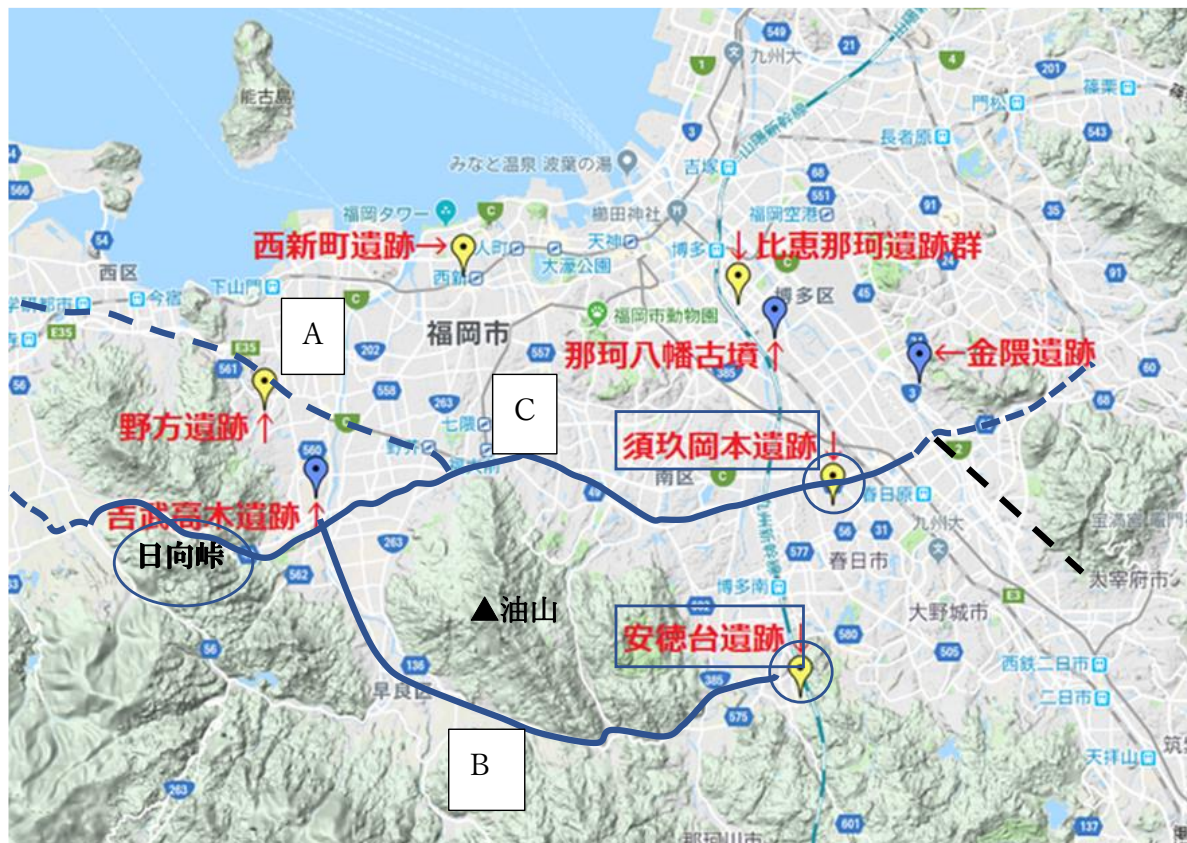


筑前の古代官道





しかも、油山の北側(C)をまっすぐ東に進むと、奴国の王墓の有力候補の一つ——須玖岡本遺跡に到達する。この C のコースは、おおむね県道 49 号線【大野城二丈線・大野城市山田四丁目(山田 4 丁目交差点)～糸島市二丈深江】に沿っている。



奴国の都は、

- ① 春日丘陵の須玖岡本遺跡あたり
- ② 那珂川上流の安徳台あたり

のいずれかにあった可能性が高いと考えている。

しかしながら、春日丘陵は福岡市のベッドタウン化が大きく進んだ地域であり、今となっては大規模・広域的な考古学的な調査は困難であり、安徳台遺跡についても、現状では 2 割程度しか発掘されていないため、確定的に述べることは難しい状況である。

ただし、御笠川水系の諸岡川流域に位置する須玖岡本遺跡よりも、奴国に由来する那珂川本流に位置する安徳台遺跡の方が有力とみているが、それを実証する考古学的な判断材料がない現段階では、しよせん主観的な判断にすぎない。安徳台遺跡発掘調査の進展を心より期待している。

したがって、現段階では日向峠から須玖岡本遺跡へ向かう C コースと安徳台へ向かう B コースの二つのコースを並列して検討する必要がある。むしろ、今後の考古学的な進展に伴い、第三の候補が登場することも十分にあり得る。

【日向峠から油山の北側(C)を**通**って須玖岡本遺跡へ向かうコース】

前述のとおり、古代官道は糸島(志摩郡)の比菩駅から長垂山の南を通って額田駅(福岡市西区野方)へ抜けるコース(A)が開拓されていたが、邪馬台国時代においては、下図のとおり、いまだ伊都国からは日向峠を越え、金武方面へ抜けるルートが主流であったとみている。

額田(野方)付近には、季刊『古代史ネット』第3号で紹介した吉武高木遺跡(福岡市西区大字吉武)もある。そして、油山の北側を東へ進み、そのまま須玖岡本遺跡に到達する。



伊都国から須玖岡本までの距離 (日向峠から油山の北側を <b>通</b> って須玖岡本遺跡へ向かうコース)				
距離	日数	『魏志倭人伝』	1里	
平原遺跡→日向峠	5.5 km	伊都国		
日向峠→金武	3.5 km	↓		
金武→油山の北側→須玖岡本	14.0 km	奴国		
計	約 23 km	2日	100里	約 230m



**【日向峠から油山の南側(B)を通過して安徳台遺跡へ向かうコース】**

油山の南側(B)を進み、安徳台遺跡に向かうコースである。

何度も紹介している神功皇后の伝承地も、この経路に沿って残されている。

下図は、神功皇后が唐津・呼子方面に事前偵察に赴き、その後拠点としていた香椎宮(福岡市東区)に帰還してくるコースを再現したものである(河村哲夫著『神功皇后の謎を解く』原書房)。

伊都国から日向峠・金武を経て、室見川をさかのぼり、内野方面から油山の南側を通過して、那珂川と交差する山田(那珂川市)に出ている。



**神功皇后の経路**

伊都国から奴国(安徳台)までの距離 (日向峠から油山の南側を通過して安徳台遺跡へ向かうコース)				
距離	日数	『魏志倭人伝』	1里	
平原遺跡→日向峠	5.5 km	伊都国		
日向峠→金武	3.5 km			
金武→油山の南側→安徳台	11.5 km	奴国		
計	20.5 km	2日	100里	205m

那珂川に面した山田は、古代における交通の要衝であった。

古い時代から山田を基点に脊振山の坂本峠を越えて肥前に通じた主要道があった。

脊振山を越えたすぐ向こうには、吉野ヶ里遺跡がある。律令時代には肥前とつなぐ道路が整備され、この地には「山田の駅」が置かれていた。





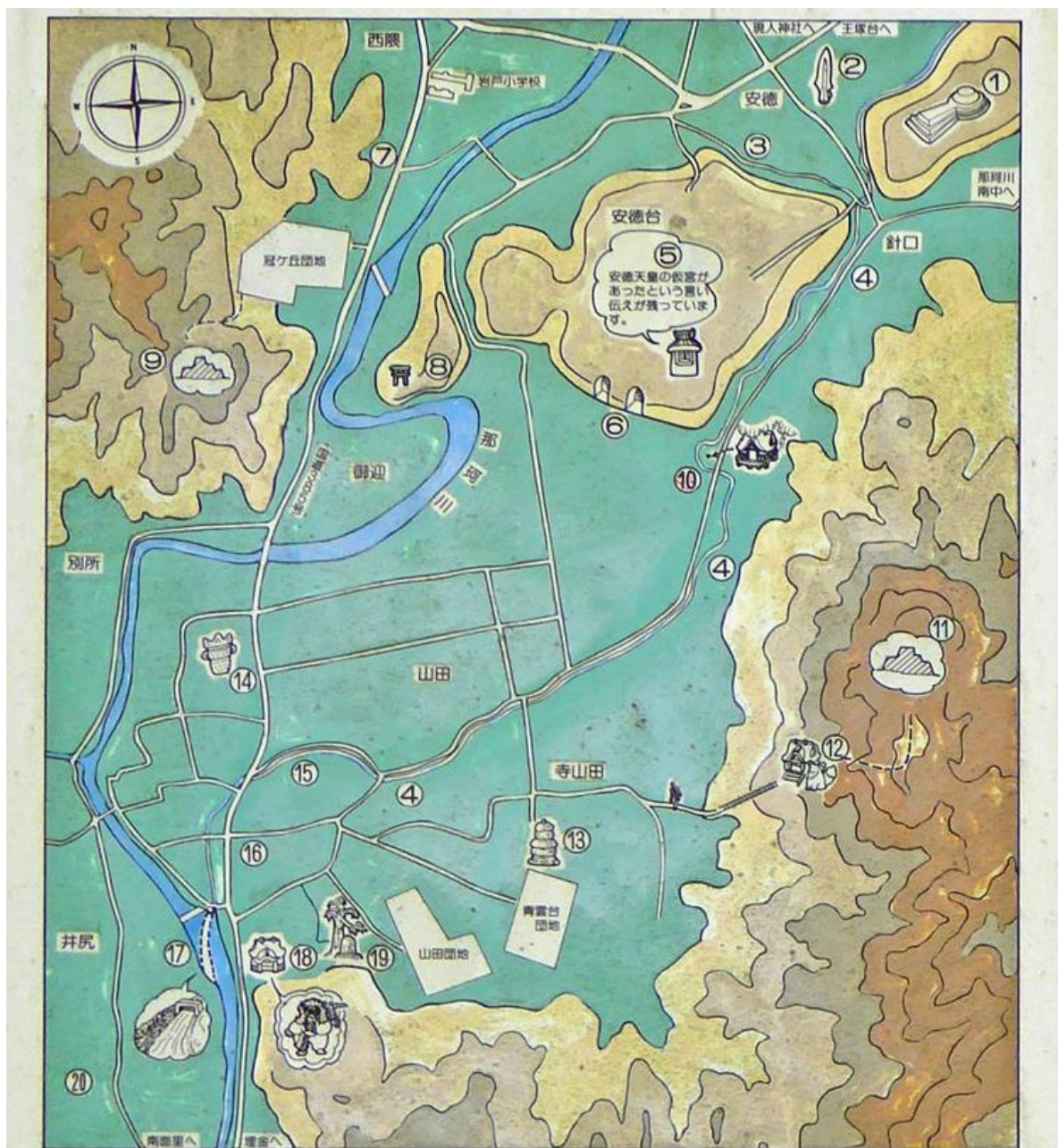






貫流し、やがて安徳台に至る。

安徳台の東南の隅近くには、神功皇后を祭神とする「裂田(さくた)神社」があり、水路はその神社のすぐ西側を迂回して北へ流れている。水路の両側には花崗岩の大岩があり、人為的に削られている。



1. 安徳大塚古墳
2. 銅鉾出土地
3. ウソの谷の水路
4. 裂田の溝
5. 安徳台遺跡群
6. 安徳横穴群
7. 西隈の防水門
8. 風早神社
9. 老林城址
10. 裂田神社(現在地)
11. 岩門城址
12. 高津神社
13. (伝)武藤景資の墓
14. 山田西遺跡
15. 小柳の景観
16. 浄光寺
17. 一ノ井堰
18. 伏見神社(岩戸神楽)
19. 高橋善蔵の墓
20. 乙子神社



### 【裂田神社を迂回する裂田溝】

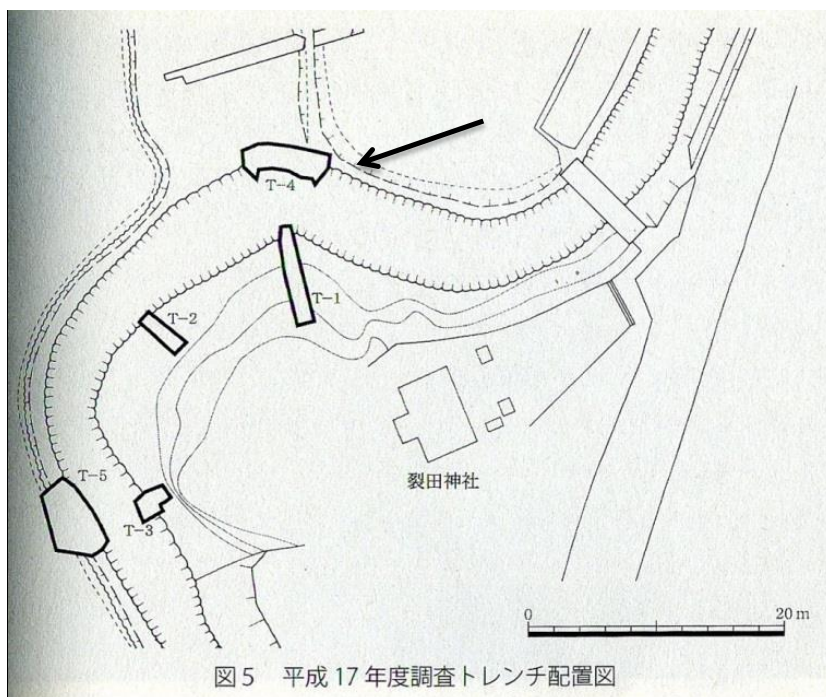


図5 平成17年度調査トレンチ配置図

### 【人為的に削られた花崗岩】



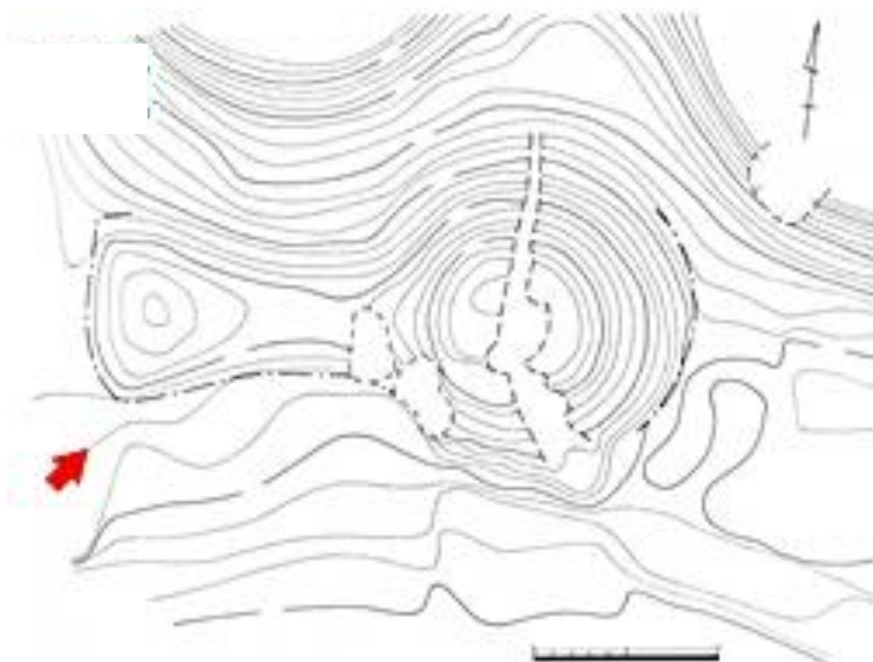
写真9 平成17年度調査第4トレンチ (花崗岩の加工痕)

『筑前国続風土記』は、「岩のある所を掘り切った場所が百間ほどある。その堀のような大溝は、岸から水面まで五、六間(約 10 メートル)から四、五間(約 8.2 メートル)あり、水の深さは二尺五寸(0.76 メートル)、あるいは二尺(0.6 メートル)ほどある。溝の広さは、下の方で一間半(約 2.7 メートル)から二間(約 3.6 メートル)ある。この溝を掘り通した所は、広く深くして、かつ長く、人力のたやすく及ぶところではない。これは皆神功皇后の時に掘られた溝であろう」とする。

### 安徳大塚古墳(那珂川市仲 4-11)

水路はなおも北進し、安徳大塚古墳の西側を流れていく。安徳大塚古墳は、古墳時代初期の前方後円墳とされる。福岡平野で最古・最大級の前方後円墳といわれる。全長約 64 メートルとされるが、前後に広い濠を有しており、これを含めると全長約 81 メートル、後円部は径 35 メートル、高さ 6 メートル、前方部幅 20 メートル、高さ 2 メートルである。墳丘には全域に葺石が敷かれ、壺形・円筒形の埴輪が置かれていた。盗掘を受けており、被葬者や副葬品なども見つからなかったが、後円部から木棺を安置するための「礫床粘土槨」があったことが確認された。いずれにしろ、古墳の規模や形状などから、大和朝廷と密接な関連を有する一大豪族の墓と考えられている。

『筑前国続風土記附録』には、「村東に大塚がある。里人は現人塚(あらひとつか)と呼ぶ。仲村の現人大明神の古宮の跡という。崇りがあるといって村人たちは恐れて近づかない」とある。

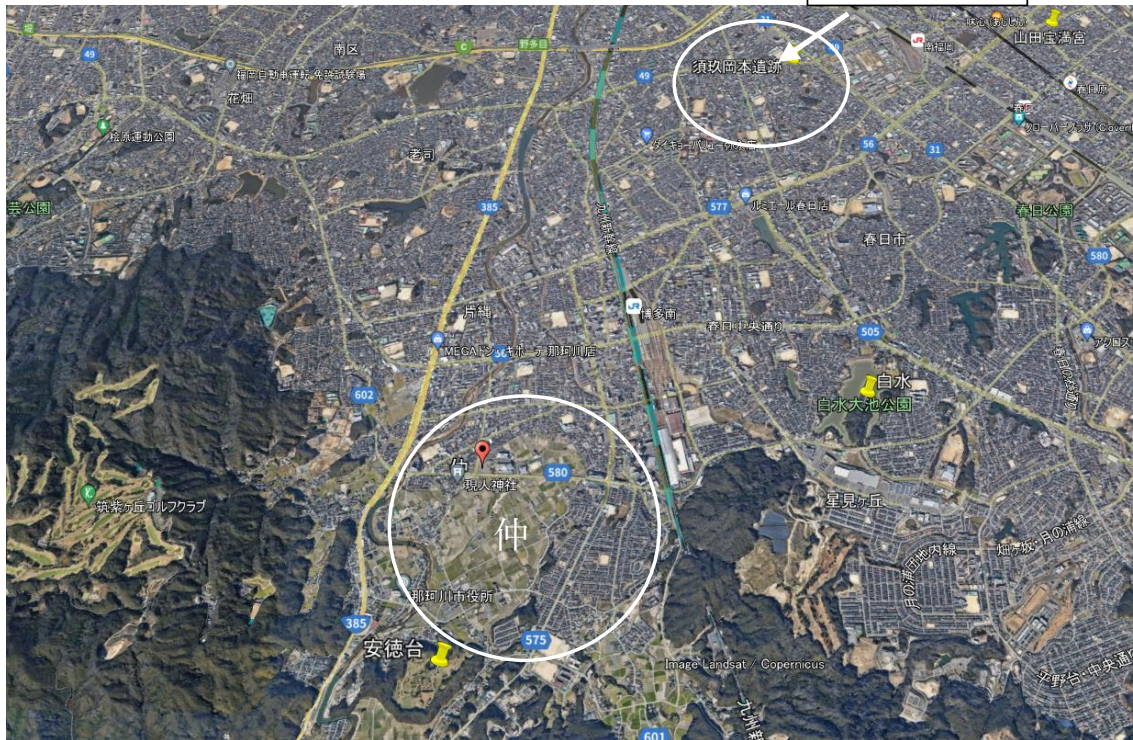






奴国の「王家の谷」

須玖岡本遺跡





安徳台の北側に「仲(ちゅう)」という大字がある。上図のおおむね○で囲った区域である。

「仲」は、もともとは「なか」と呼ばれた。奴=中=仲=那珂である。奴国の発祥の地、中枢の地——都であり、筆者はひそかに「王家の谷」とも呼んでいる。西側の山塊は油山で、東側は脊振山からせり出した石割山(167m)である。その西麓は王塚台と呼ばれる。いわくありげな地名ではあるが、残念ながら、大規模宅地開発に伴い昭和53年(1978)につくられた地名である。





## 現人神社(那珂川市仲)

この仲には、住吉三神を祭る「現人神社」も祭られている。



那珂川の上流右岸にあり、案内板には、次のように記されている。

現人神社(住吉三神総本宮)略誌

御祭神 住吉三神(底筒男命・中筒男命・表筒男命)

御由緒 並びに御神徳

伊邪那岐の大神、筑紫の日向の橘の小戸の櫛原にて禊祓い給いし時に生まれし住吉三柱の大神を祭祀した最も古い社にして、神功皇后(1780年前)三韓遠征の際、軍船の舳先に御形を現し、玉体を護り進路を導き、無事凱旋せしめた御神として、皇后いたく畏(かしこ)み奉りて、この住吉の神の鎮まり座す現人宮を訪れ、神田に水を引かむと山田の一の井堰を築き、裂田の溝を通水して、五穀豊穰の誠を捧げられ、現人大明神の尊号を授けられ、供奉の藤原朝臣佐伯宿禰をして祀官せしめられてより、現人大明神と称す。

摂津の住吉大社は現人大明神の和魂(にぎみたま)を祀り、福岡の住吉宮は(1200年前)分霊せらる。

「住吉三柱の大神を祭祀した最も古い社にして」と書かれ、筑前国一の宮・住吉神社(福岡市博多区)の元宮とされている。

すでに述べたように、福岡平野には多くの住吉神社が存在する。

	神社名	所在地	伝承
①	住吉神社	福岡市博多区住吉	筑前国一の宮。下社。境内から弥生時代の銅戈・銅鏃が出土。神功皇后伝承あり。
②	現人神社	那珂川市仲	上社。神功皇后が裂田溝を開設して水田を奉納
③	住吉神社	春日市日佐	中社
④	住吉神社	福岡市中央区若久	黒田長政創建とする説あり
⑤	住吉神社	春日市小倉	神功皇后伝承あり。牛の舌餅
⑥	住吉神社	春日市須玖	三の宮とする伝承あり。
⑦	白鬚神社	福岡市西区能古島	神功皇后伝承あり。住吉三神の霊を残した。
⑧	住吉神社	福岡市西区姪浜	神功皇后伝承あり。

那珂川・諸岡川流域に六社、博多湾の能古島に一社、西区姪浜に一社の計八社である。

八社のうち、五社に神功皇后伝承が残され、春日市日佐と須玖の二社の周辺には、古い弥生遺跡群がある。





このうち、那珂川上流の現人神社が所在する「仲」は奴＝中＝那珂に通じる字名であり、縄文遺跡や弥生遺跡が密集し、古い時代から奴国の拠点的な集落があったとみられる地域である。

安徳台遺跡もあり、神功皇后ゆかりの「裂田溝」もある。

「住吉三神は、おそらく奴国を支配した王族の氏神であった」あるいは「住吉三神は奴国の防衛をつかさどる奴国王族のシンボル」とみていることについては、奴国の時代で詳しく述べたとおりである。

ただし、そのときは論じなかったが、住吉神社ではなく、何ゆえ「現人(あらひと)神社」と呼ばれるようになったかは定かでない。

しかしながら、手がかりはある。豊前に同名の現人神社(田川郡香春町大字採銅所)があるからである。



都怒我阿羅斯等命(ツヌガアラシト)を主祭神として祭っている。

『日本書紀』によれば、崇神天皇の時代に朝鮮の「意富加羅国(おおからのくに)」の王子のツヌガアラシトが海を渡って角鹿(福井県敦賀市)の筥飯浦(けひのうら)に上陸した。

意富加羅国とは、朝鮮半島南部にあった加羅諸国、すなわち朝鮮の史書『三国遺事』にいう「五伽耶」の一つである「大伽耶」のことである。『三国遺事』には「大駕洛」あるいは「伽耶国」としても出てくる。高霊を拠点としていた。

何ゆえ田川郡の香春町にツヌガアラシトを祭神とする現人神社が祭られたかという、神功皇后がこの地を通過するとき、ツヌガアラシトゆかりの人物を残していったからである。

『太宰管内志』に、香春神社の神官の三家として赤染氏二家、鶴賀氏一家を挙げているが、この鶴賀氏はツヌガアラシトの末裔と伝えられている。香春神社のうち、大目命(第一殿)と忍骨命(第二殿)の祭祀を司る神官が赤染氏で、豊比咩命(第三殿)の祭祀を司る神官が鶴賀氏であったという。

要するに、ツヌガアラシトの末裔がこの地に住み着き、先祖のツヌガアラシトを祭るための社一が現人神社と呼ばれるようになったのである。

那珂川市の現人神社もまた神功皇后ゆかりの神社であり、資料・伝承には見当たらないが、香春とおなじく、神功皇后はこの地にもツヌガアラシトゆかりの人物を神官として残していった可能性がある。

### 天御中主命

さらにいえば、那珂川市には天御中主命を祭神とする「御中主神社」(那珂川市片縄東 1-5-13)がある。



奴国の時代で述べたように、天御中主命は『古事記』冒頭に出てくる神であり、『新唐書』日本伝では、倭の奴国の「初主」——初代の王とされている。筆者は西暦 57 年に光武帝から金印を授けられた王とみている。

奴(nag)=中=仲=那珂=ナカである。

「延喜式神名帳」には全国 4132 の神社が載せられているが、天御中主神を祭神とする神社は見当たらないなかで、那珂川市にはひっそりと天御中主神を祭神とする「御中主神社」が祭られている。



そして、これまたすでに述べたとおり、天皇家を含む古代のすべての豪族は天御中主命の末裔とされている。

### 天皇家など各氏族の系譜

	天御中主命	イザナギ	天照大神	神武天皇
天皇家	○	○	○	○
尾張氏	○	○	○	×
物部氏	○	○	○	×
出雲氏	○	○	○	×
宗像氏	○	○	○	×
阿曇氏	○	○	×	×
中臣氏	○	×	×	×
大伴氏	○	×	×	×
宇佐氏	○	×	×	×
忌部氏	○	×	×	×

天皇家など日本における主要な氏族のすべてが天御中主命を始祖としている。彼らのルーツである奴国の代々の王が君臨した場所こそがこの地である。

那珂川上流に位置するこの地は、奴国の「王家の谷」であった可能性がきわめて高い。

### 周辺の遺跡群

那珂川市作成の資料によって周辺の主要な遺跡群を紹介すれば次のとおり。

#### 今光・宗石遺跡群

今光・宗石遺跡群は今光の安徳公園付近一帯に広がる遺跡群で、これまでの発掘調査で縄文時代から中世にかけての遺跡が重なりあった複合遺跡であることが確認されています。このうち弥生時代の遺跡としては、甕棺墓と住居・土壇・方形周溝が見つかっています。甕棺墓は全部で95基が調査されており、時期は中期から後期にかけてのもので、40号甕棺墓からは銅釧（腕輪）が4個出土しています。また、全国で初めて表面を黒く塗った甕棺が見つかり、注目を集めました。



40号甕棺墓出土状況  
四角い墓ごうの中に、二つの甕が口を合わせた状態で出土した。甕の中には人骨は残っていなかったが、銅釧が出土した。（甕の大きさは二つを合わせて約1.7m）



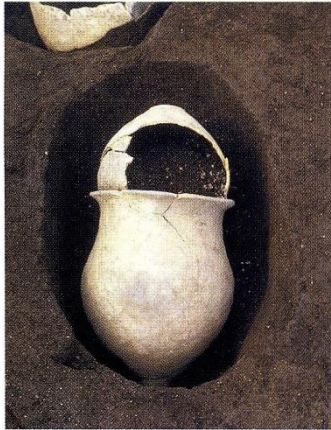
銅釧（腕輪）  
青銅製の腕輪で、砕けた状態で出土した。本来の姿に復元するのは無理であったが、おおよそ写真の大きさの釧が4個あることがわかった。（径約7cm）



甕と高坏  
食べ物などを蓄える甕（左）と食べ物などを盛る高坏（右）で、弥生時代の終わりごろつくられた。11号土壇から出土。（左：高さ約40cm）

## まつの き い せき ぐん 松木遺跡群

梶原川を挟み、宗石遺跡群の対岸に広がる遺跡で、これまでの発掘調査で縄文時代から中世にかけての遺跡が発見されています。このうち弥生時代の遺跡は住居や貯蔵穴、甕棺墓、土壙墓、木棺墓などが確認されており、時期は前期から中期の初めごろのものが中心です。特にこの時期の甕棺墓は本遺跡で最も多く見つかっており、那珂川町の弥生時代の始まりを考えるうえで、貴重な遺跡といえます。



140 街区 15 号貯蔵穴(上)  
長さ約 1.3m、深さ約 1m と小形の貯蔵穴(食べ物などを保存する穴)だが、底から土器が出土している。

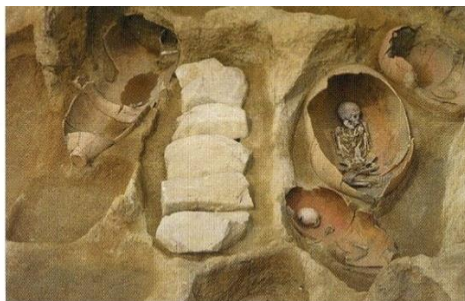
貯蔵穴から出土した土器  
食べ物などを蓄える壺(左)・甕(右)と、蓋形土器(手前)。  
(左奥:高さ約 40cm)

140 街区 6 号甕棺墓(左)  
前期の甕棺墓で、日常容器の壺に近い形をしている。(長さ約 1m)

## かん のん どう い せき ぐん 観音堂遺跡群

観音堂遺跡群は、観音堂バス停から片縄バス停間の西側に広がる丘陵上に営まれた遺跡で、発掘調査の結果、縄文時代から平安時代までの遺跡が見つかっています。

このうち遺跡の中心になるのは、弥生時代の前期の終わりから後期にかけてのお墓で、木棺墓 3 基と甕棺墓 92 基、石蓋土壙墓 1 基が発見されています。墓地は区域や範囲に決まりがあったのか、南北方向に列をなしてつくられ、時期を見ると丘陵先端部に古いものが多く、奥に向かうに従って新しくなっています。また、74 号甕棺墓から硬玉製の管玉、22 号甕棺墓から中国製の銅鏃、そして 80 号甕棺墓からは貝輪(腕輪)が出土しています。貝輪は当時、特別な地位の人でなければ持つことが出来ない貴重な品物ですが、これを身に付けていたのは 3 歳くらいの幼児であったため、この時代から権力の世襲制が行われていたことを示唆する、日本で初めての発見となりました。



発掘調査の様子  
左から 82 号甕棺墓、石蓋土壙墓、80 号甕棺墓、79 号甕棺墓、78 号甕棺墓。このうち石蓋土壙墓からは刀子が、80 号甕棺墓からは貝輪が出土した。



80 号甕棺墓貝輪出土状況  
貝輪の中と貝輪にたおれかかるようにして腕の骨が残っていた。





貝輪(腕輪)  
80号壘棺墓から出土。安徳台遺跡群出土の貝輪と同じく、ゴホウラ貝でできている。(長さ約6cm)



銅鏃(左)  
青銅(すずと銅でできた合金)でつくられた矢じりの破片。中国からの輸入品。22号壘棺墓出土。(長さ約1.2cm)



石剣(右)  
剣の先端だけの出土のため、死者に刺さっていたものかわかりません。14号壘棺墓出土。(長さ約8cm)



管玉(左)  
硬玉製で、つなげて首飾りなどにして使われた。74号壘棺墓出土。(長さ約4~7mm)



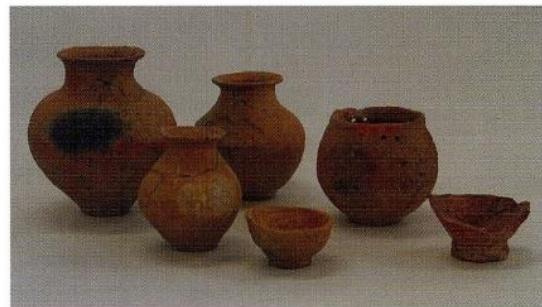
刀子(右)  
鉄製の小刀。石蓋土墳墓から出土。(長さ約11cm)

## カクチガ浦遺跡群

カクチガ浦遺跡群は、王塚台から松木南交差点一帯に延びる丘陵上に営まれた遺跡で、弥生時代から平安時代までの遺跡が発見されています。このうち弥生時代の遺跡は、平野を見下ろすことができる丘陵先端の高まりを中心に、住居が5軒、貯蔵穴が12基、土壇が34基確認されています。貯蔵穴は食べ物を保存するための貯蔵庫で、深さは3mほどあります。中からは貯蔵した食べ物を入れたと思われる土器が見つかっています。



3号貯蔵穴の調査風景(左)  
那珂川町で一番大きな貯蔵穴で、深さは3.5m以上もある。



貯蔵穴から出土した土器  
壺(左3個)と鉢(手前)と無頸壺(右奥)(左:高さ約20cm)



あんとくはらだ いせきぐん  
**安徳原田遺跡群**

安徳台遺跡群の眼下に広がる遺跡群で、V字形に広がる平野部の一番奥まった部分に営まれています。調査例が少なく遺跡の内容は良く分かっていませんが、弥生時代から中世にかけての遺跡が見つっています。このうち弥生時代のものとしては、中期の甕棺墓が1基と後期の溝が1条確認されているだけです。溝の中からは祭祀に使われた赤く色を塗った筒形器台が出土しています。また、本遺跡からは銅矛が12本出土しており、今後の調査が期待されています。



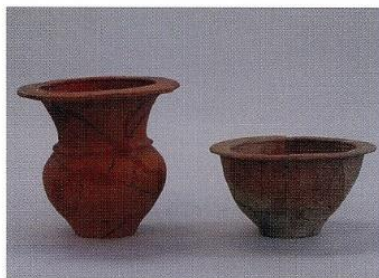
**昭和 62 年度調査区全景**  
 現在のライスセンター建設前に行った発掘調査の様子。調査区上辺のほぼ中央から斜め左下にのびる大溝が発見された。



**大溝**  
 幅約3mの大溝の一番上で、土器がまとまって出土した。出土した土器から、祭祀(まつり)を行った跡と思われる。(写真左)  
 右の写真は筒形器台が出土した様子。

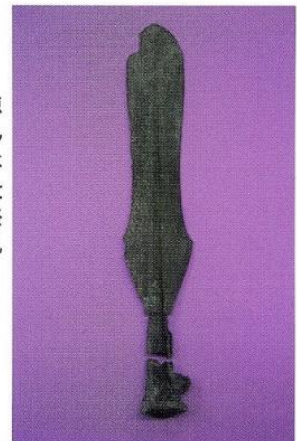


**筒形器台(大溝出土)**  
 表面が赤く塗られている。(高さ約 60cm)

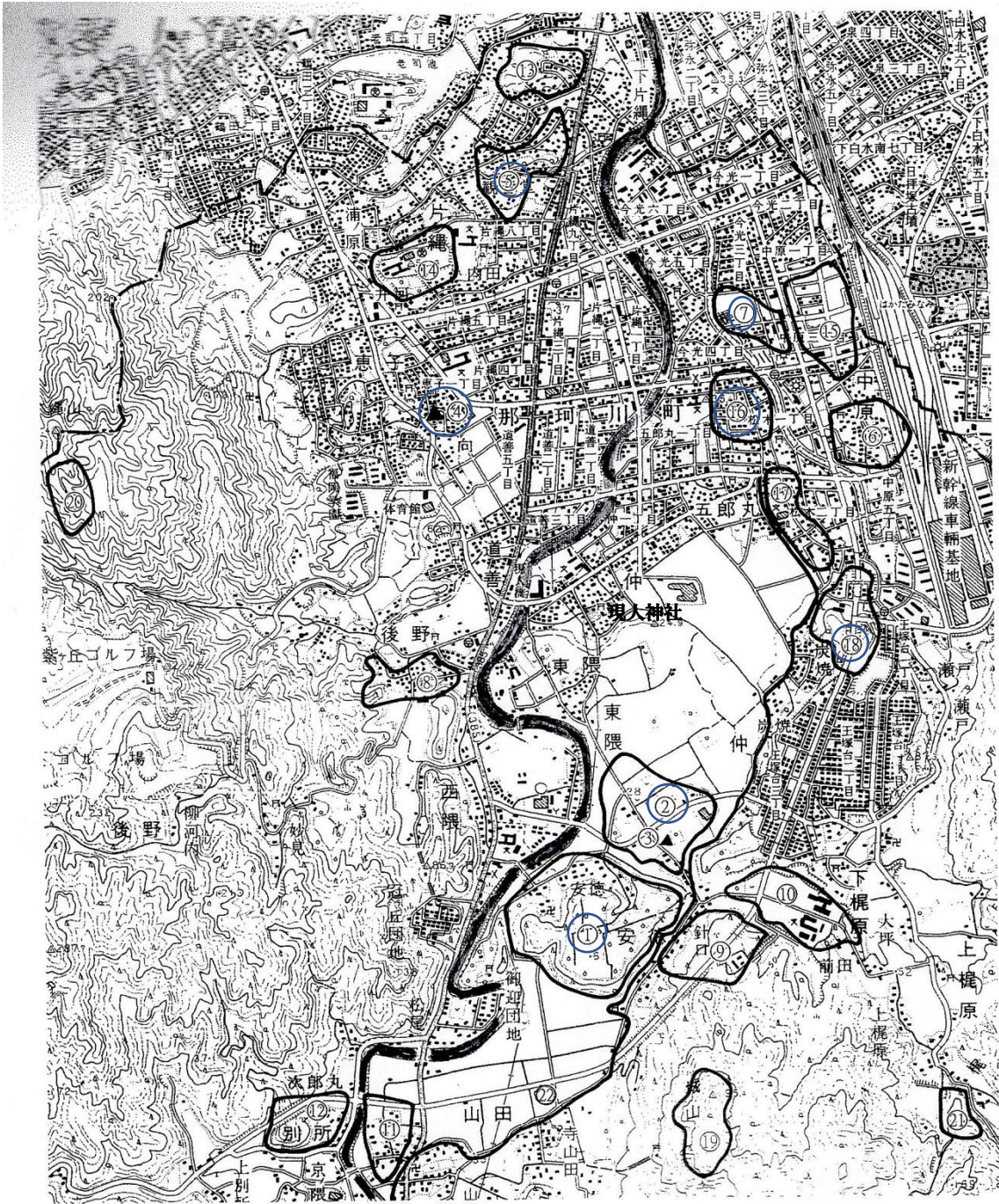


**甕(左)と鉢(右)**  
 甕は筒形器台と同じ大溝から出土。鉢は 2号溝から出土。(右:高さ約 22cm)

**銅矛(右)**  
 明治 31 年に安徳の原田から出土した12本のうちの1本である。広形銅矛といわれるもので、祭器として使用された。長さ約 90cm  
 (藤野徹成氏蔵)







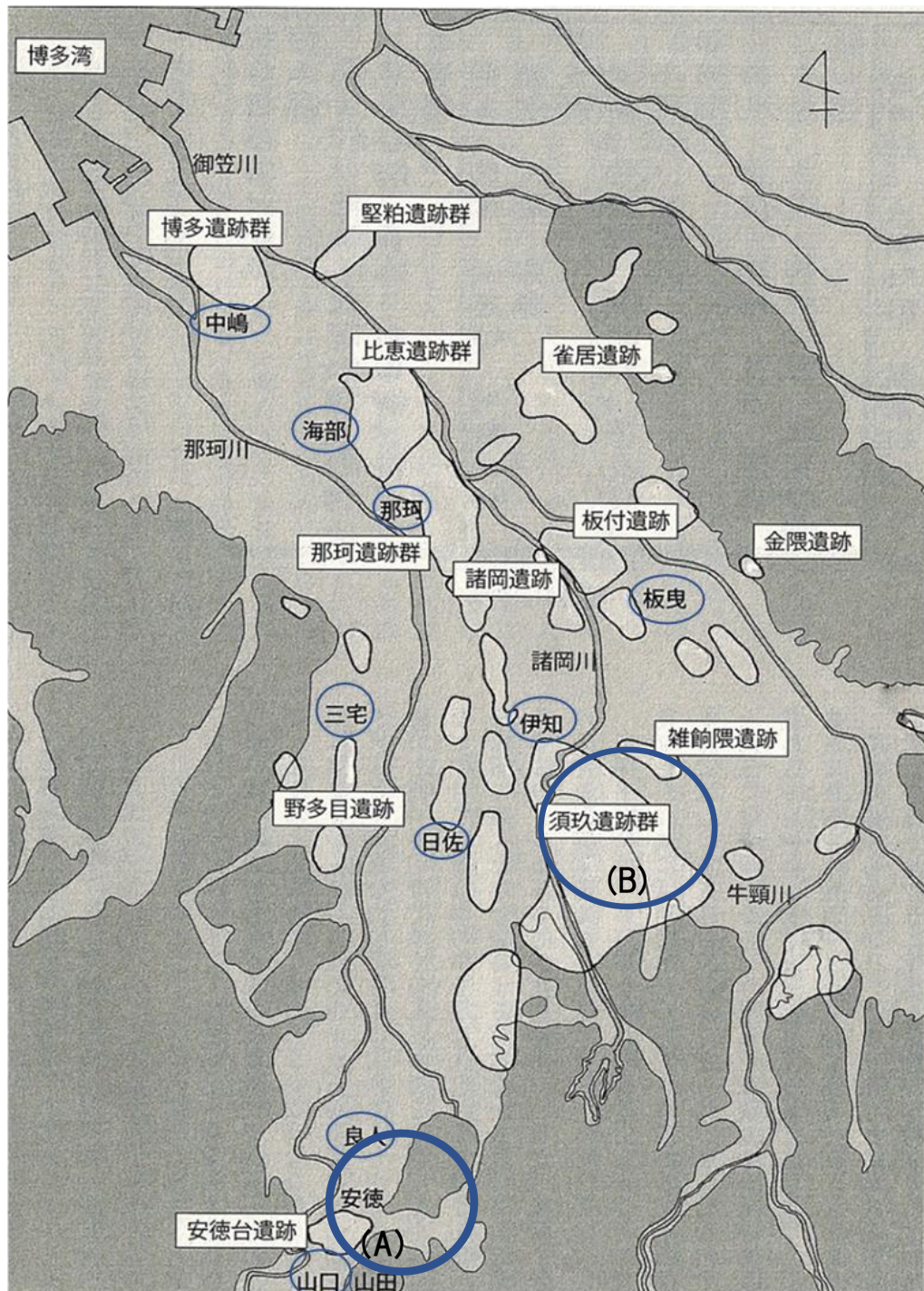
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

- |            |              |               |
|------------|--------------|---------------|
| 1 安徳台遺跡群   | 9 龍頭遺跡群      | 17 台政遺跡群      |
| 2 安徳原田遺跡群  | 10 平蔵遺跡群     | 18 カクチカ遺跡群    |
| 3 安徳銅鉾出土地  | 11 山田西遺跡群    | 19 岩門城        |
| 4 恵子銅鉾出土地  | 12 別所・次朗丸遺跡群 | 20 後野・山ノ神前遺跡群 |
| 5 観音堂遺跡群   | 13 野口遺跡群     | 21 地別当遺跡群     |
| 6 中原塔ノ元遺跡群 | 14 城ノ越遺跡     | 22 裂田溝        |
| 7 宗石遺跡群    | 15 中原・ヒナタ遺跡群 |               |
| 8 坂口遺跡群    | 16 松木遺跡群     |               |



奴国の都のもう一つの有力候補地は春日丘陵

御笠川と諸岡川・牛頸川に挟まれた春日丘陵には、多くの弥生遺跡群があり、「弥生銀座」とも呼ばれる。





### 須玖岡本遺跡

いうまでもなく、代表的な遺跡は須玖岡本遺跡(春日市)である。

すでに述べたとおり、須玖岡本遺跡D地点からは、草葉文鏡三面・星雲文鏡五面・連弧文昭明鏡四面・連弧文清白鏡八面など前漢鏡約 30 面が発見されており、これまた奴国を統括した「王」の存在を示唆している。

のちに述べるように、春日丘陵から発掘されたおびただしい青銅器鑄型は、奴国王の強大な権力を物語るとともに、さながら青銅器一大生産センターの様相を呈している。

奴国の王の権威は、青銅器をはじめ、ガラス、鉄器などを製造するテクノポリス集団に支えられていたとも考えられる。

### 岡本町 4 丁目遺跡(春日市)

須玖岡本遺跡のすぐ南、標高 37 メートルの丘陵上の遺跡である。

弥生中期前半から後期初頭のカメ棺墓 130 基、木棺墓、土壙墓 9 基、住居跡 9 軒、祭祀遺構 8 基が出土した。未発掘のカメ棺墓は約 300 基とみられている。

木棺墓から鉄剣、祭祀遺構近くで小銅鐸の鑄型が見つまっている。

### 赤井出遺跡(春日市赤井出)

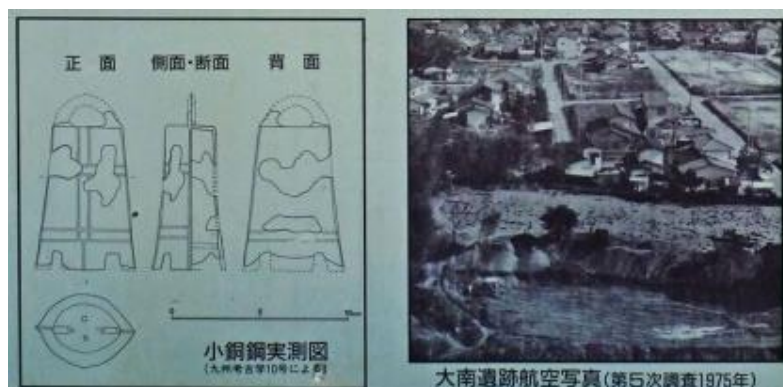
岡本 4 丁目遺跡から西へ 400 メートルの位置にあり、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての遺跡である。標高 38 メートル。

弥生時代の住居跡 28 軒、古墳時代 25 軒、時期不明 39 軒の竪穴住居、掘立建物 17 棟、土壙墓 16 基、カメ棺墓 29 基など。鉄器工房跡と青銅器鑄型 9 点、ガラス勾玉の鑄型が見つまっている。

### 大南遺跡(春日市大谷)

弥生時代中期の円形住居跡 8 軒、後期の方形・長方形住居跡94軒、不明の住居跡2軒が発掘された。また、広形銅戈鑄型や九州初の発見となった小銅鐸などが出土した。

東側丘陵は調査前に消滅。大南遺跡は大谷遺跡の北側の丘陵にあったが、現在では、住宅街になっており、遺跡の面影はない。



# 大南遺跡



大南遺跡西側V字溝(北から)



大南遺跡銅戈鑄型出土状態

大南遺跡は三方に突き出た小丘陵上に造られていました。1960年(昭和35年)県教育委員会の第1次調査に始まり、1977年(昭和52年)春日市教育委員会の調査まで7次にわたって発掘調査が行なわれました。

丘陵の中段にV字溝をめぐらし、丘陵上には弥生時代中期(約1900~2100年前)の円形住居跡8軒、後期(約1700~1900年前)の方形・長方形住居跡94軒、不明2軒の住居跡が密集して発掘されました。

東側丘陵は調査前に消滅しましたが、遺跡全体では弥生時代後期を中心とする200軒近くの住居跡が考えられます。他に貯蔵穴、石棺墓、奈良時代以降の掘立柱建物がありました。

遺物は、銅鋤先、鉄製品、広形銅戈鑄型、石包丁、砥石、ガラス製玉類、九州で初めての発見として話題になった小銅鐸などが出土しています。

## 大谷遺跡(春日市大谷)

弥生時代から江戸時代の複合遺跡。

弥生時代中期の住居跡 67 軒とカメ棺墓 8 基・貯蔵穴、古墳 8 基や青銅器鑄型と江戸時代の墓などが出土。特に中細銅矛鑄型は飯塚市の立岩遺跡と類似する。



# 大谷遺跡

大谷遺跡は、大南遺跡ととなりあわせにあった集落・墓地遺跡です。（現在の大谷小学校敷地とスポーツセンターの相撲場、弓道場部分）。1977～78年（昭和52～53年）春日市教育委員会調査。）

遺跡は丘陵上に弥生時代中期中ごろから終末（約1700～2000年前）の住居跡67軒、中期の甕棺墓8基、貯蔵穴が出土し、古墳8基および江戸時代の墓もありました。おもな遺物に青銅器鑄型（鐸3、矛2、劍2、戈1、不明1、いずれも破片）があります。

遺物のうちB区10号住居跡出土の中細銅矛鑄型は、飯塚市立岩遺跡出土の銅矛との類似が指摘されています。銅鐸鑄型は裾部に突帯をめぐらし、粗雑な鋸歯文が施されヒレ部は存在しないもので、銅鐸の生産開始をめぐって重要な資料となっています。



大谷遺跡住居跡群(1977年)



大谷遺跡B地区10号住居跡



大谷遺跡出土銅矛鑄型

写真は鑄型のこの部分です



遺構配置略図

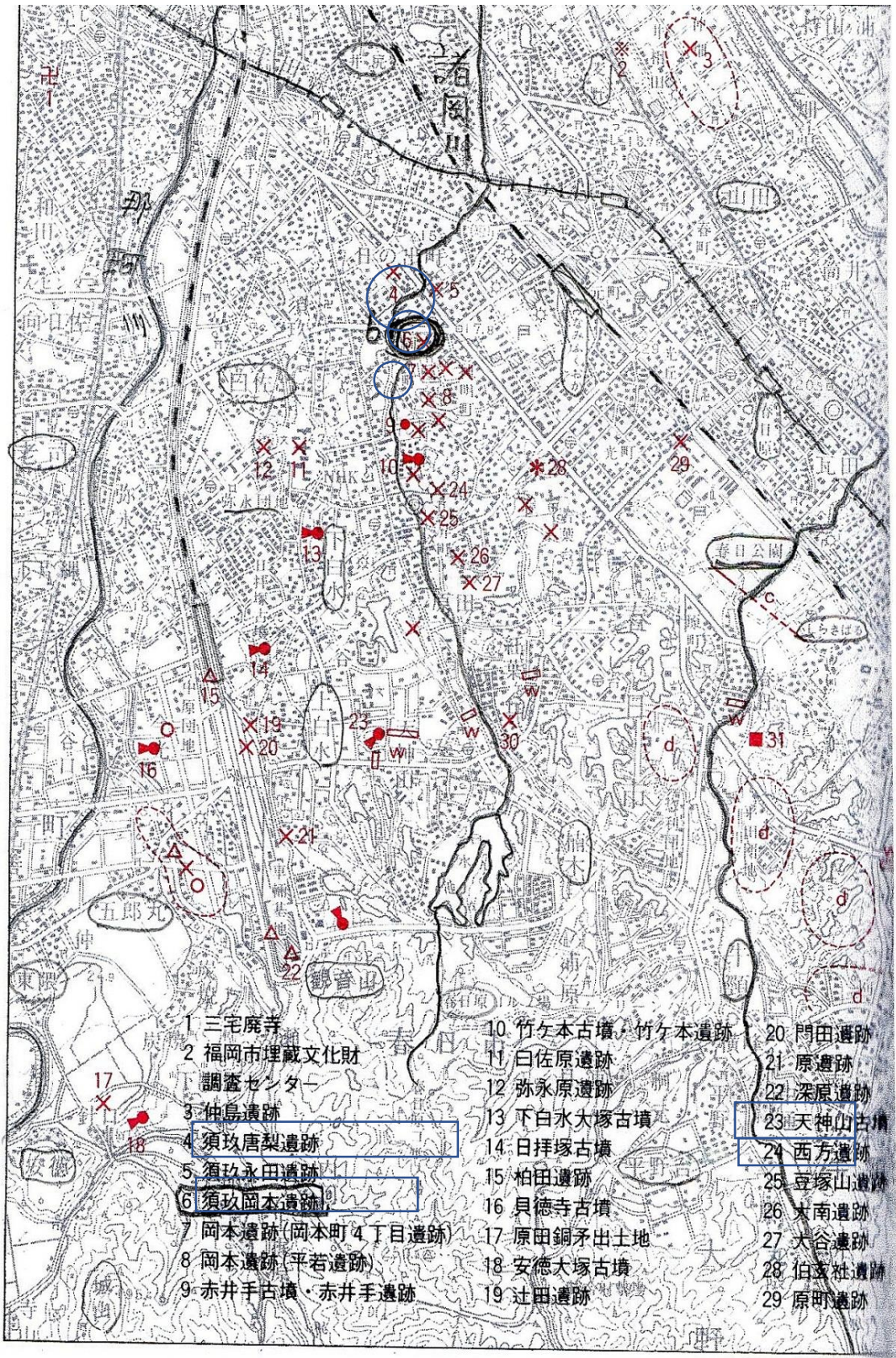


写真は鑄型のこの部分です

大谷遺跡出土銅鐸鑄型

1989年2月 春日市教育委員会











地域	その													武器合計 (A)	その他合計 (B)	型個数(A) +	型個数(B)	
	鉈	棒状品	小銅鐸	銅外縁付鈕	銅鐸不明	銅鏃	銅釧	巴形銅器	小形倣製鏡	十字形金具	筒状品	異形品	不明品					鑄型か
福岡					1	4			1			1	2	5	38	14	52	40
春日		1	4	2		65	1	1	5		1		36	7	112	123	235	149
唐津															2	0	2	1
糸島														1	6	1	7	7
早良									2				1		8	3	11	9
粕屋						1		3							10	4	14	11
筑紫						4	1		1	2			1		10	9	19	13
筑後									2			1	2		0	5	5	2
遠賀													1		1	1	2	2
筑豊	1		2									1			3	4	7	7
鳥栖		3		1	5							1	2		22	12	34	25
佐賀	1	1							1			1			21	5	26	15
熊本															2	0	2	1
合計	2	5	6	2	6	1	73	5	2	11	2	1	5	14	235	181	416	282

①福岡地域、②春日地域、③唐津地域、④糸島地域、⑤早良地域、⑥粕屋地域（糟屋郡・宗像郡）、⑦筑紫地域（春日地域以南、筑後川以北）、⑧筑後地域（筑後川以南の福岡県域）、⑨遠賀地域（遠賀郡）、⑩筑豊地域（遠賀川と支流域一帯<sup>4)</sup>）、⑪鳥栖地域、⑫佐賀地域、⑬熊本地域に区分する

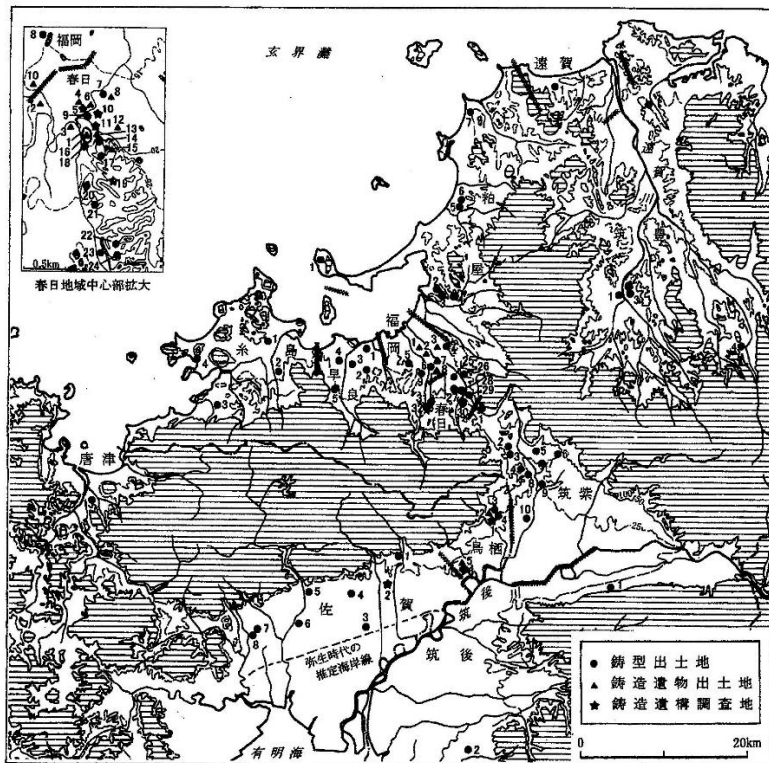


図1 青銅器生産関連遺跡の分布



- 〔福岡地域〕 1 比恵遺跡群, 2 那珂遺跡群, 3 雀居遺跡, 4 赤穂浦遺跡, 5 高宮八幡, 6 五十川, 7 板付遺跡, 8 井尻B遺跡群, 9 大橋E遺跡, 10 笠坂遺跡
- 〔春日地域〕 1 須玖岡本遺跡, 2 御殿遺跡, 3 タカウタ遺跡, 4 須玖唐梨遺跡, 5 五反田遺跡(第1次), 6 五反田遺跡(第2次), 7 楠町遺跡, 8 黒田遺跡, 9 須玖水田遺跡B地点, 10 須玖水田遺跡A地点, 11 須玖坂本遺跡, 12 須玖尾花町遺跡, 13 須玖岡本遺跡(第5次), 14 須玖岡本遺跡(第11次), 15 須玖盤石遺跡, 16 須玖岡本遺跡(第7次), 17 岡本遺跡, 18 岡本の上遺跡(第4次), 19 須玖平若遺跡C地点, 20 赤井手遺跡, 21 竹ヶ本遺跡(C地点), 22 大南遺跡, 23 トバセ遺跡, 24 大谷遺跡, 25 仲島遺跡, 26 森園遺跡, 27 駿河遺跡, 28 石勺遺跡, 29 瓦田, 30 九州大学筑紫地区遺跡, 31 中白水遺跡, 32 門田遺跡
- 〔糸島地域〕 1 元岡, 2 三雲・三雲屋敷田・三雲川端, 3 曲り田遺跡, 4 御床松原遺跡
- 〔早良地域〕 1 西新町遺跡, 2 飯倉D遺跡, 3 有田遺跡, 4 拾六町平田遺跡, 5 吉武遺跡群(第1次)
- 〔粕屋地域〕 1 勝馬遺跡, 2 香椎松原, 3 多田羅大牟田, 4 八田, 5 久保長崎遺跡, 6 浜山遺跡, 7 勝浦高原遺跡
- 〔筑紫地域〕 1 国分尼寺遺跡(7次), 2 永岡遺跡, 3 飯塚南遺跡, 4 隈・西小田遺跡(第6地点), 5 宮ノ上遺跡, 6 ヒルハタ遺跡, 7 小田・中原前, 8 津古東台遺跡, 9 乙隈天道遺跡, 10 大板井遺跡
- 〔筑後地域〕 1 益生田寺遺跡, 2 上枇杷遺跡
- 〔遠賀地域〕 1 吉木
- 〔筑豊地域〕 1 亀ノ甲遺跡, 2 焼ノ正遺跡, 3 下ノ方遺跡, 4 庄原遺跡, 5 松本遺跡
- 〔鳥栖地域〕 1 安永田遺跡, 2 袖比前田遺跡, 3 袖比本行遺跡, 4 平原遺跡, 5 本行遺跡, 6 江島
- 〔佐賀地域〕 1 西石動, 2 吉野ヶ里遺跡, 3 姉遺跡, 4 篠ノ木, 5 惣座遺跡, 6 鍋島本村南遺跡, 7 仁俣遺跡, 8 土生遺跡
- この他に熊本市白藤遺跡

## 後藤氏の論文のまとめ

時 期	弥生時代	概 要
第1期	前期末・中期中頭～中期前半	佐賀・鳥栖・春日地域で第3期まで継続する。 ・細形銅武器、小銅鐸 ・中細形銅武器の生産も開始
第2期	中期中ごろ	・佐賀・鳥栖・春日＋福岡地域 ・春日地域がもつとも生産規模が大きく、また中細形のすべての細別型式を製作している。
	中期後半ごろ	・＋糸島地域
第3期	中期後半～中期末	・佐賀・鳥栖・春日・福岡＋糟屋・筑紫 ・春日地域は福岡地域とともに大工房群を運営し、最も多く生産していた。
	後期前半～後期後半	

※古典的年代論に基づき年代を補足すれば次のとおりとなろう。

- ①第1期は紀元前2～前1世紀、第2期は前1～紀元前後、第3期は紀元前後～後3世紀。
- ②第1期から第3期前期までは奴国の時代、第3期後期は邪馬台国の時代と重なるであろう。

### (1)銅武器の生産

#### ①細形銅剣など武器の生産開始地域

- ・細形銅剣などもっとも早く製作を始めたのは春日と鳥栖地域と認められ(筑豊も可能性はある)、その時期は中期前半あるいは初頭。
- ・春日では大谷遺跡かその付近の春日丘陵上で始まり、後の時代には春日丘陵北端部の(須玖岡本あたり)一帯が青銅器生産の中心になる。
- ・福岡の生産の上限は中期中ごろ。

#### ②中細形銅武器の鋳型

- ・剣・矛・戈すべてが出土しているのは春日(25個)、鳥栖(5個)、佐賀(6個)の3地域。
- ・春日地域の量が他を圧倒し、福岡地域がそれに次ぐ。
- ・中細形銅武器の鋳型の量は59パーセントに達し、福岡平野での生産量が突出。
- ・春日地域の生産量が増大し、福岡地域にも生産工房が広がり、大量生産をまかした。

- ・戈が急激に増え、50 パーセントを越える。
- ・製品量も戈が最も増え(65 パーセント)、剣(c 類は除く、22 パーセント)、矛(13 パーセント)ははるかに少ない。
- ・1 か所の埋蔵量も 30～50 本近くになるが、副葬地は春日、糸島、唐津、筑豊に限られる。
- ・筑紫地域に 66 本が埋納され、九州出土製品量の 47 パーセントを占め、春日地域の 29 パーセントより多く、その他各地域をはるかに凌駕する。筑紫地域の大量の中細形銅戈はほとんどは北に隣接する春日地域から入手したものであろう。

### ③中広形銅武器の鑄型

- ・剣が銅武器から消え去る。圧倒的に矛が多く、戈はきわめて少ない。
- ・引き続き春日地域の量が突出し、福岡地域と合わせれば 4 分の 3 を占める。

### ④広形銅武器の鑄型

- ・春日地域 10 個、福岡地域 12 個で圧倒的に多く、次いで糸島地域の 6 個。

### (2)小銅鐸の鑄型

- ・春日地域 6 個(大谷遺跡 1 個、岡本遺跡 1 個、須玖永田遺跡 2 個、須玖坂本遺跡 2 個)、筑豊地域(若松遺跡)で 2 個出土。

### (3)銅鐸の鑄型

- ・福岡地域 1 個(赤穂浦遺跡)、鳥栖地域 5 個(安永田遺跡)。
- ・いずれも外縁付紐式横帯文銅鐸である。

### (4)小型仿製鏡の鑄型

- ・製品は九州だけでなく、関東、北陸までの各地で出土
- ・近畿でも製作している(大阪府垂水遺跡出土鑄型・北九州市考古格物館 1997)
- ・時期は後期、広形銅武器の段階である。
- ・春日地域に多いのはこの地域の青銅器生産状況からは当然であろう。
- ・数も多く広形銅矛ほど高位の儀礼具ではないため各地で生産したのであろう。

### 奴国から不弥国へ

このように、奴国に属する春日丘陵は、北部九州における青銅器製造の一大テクノセンターであったと断言している。

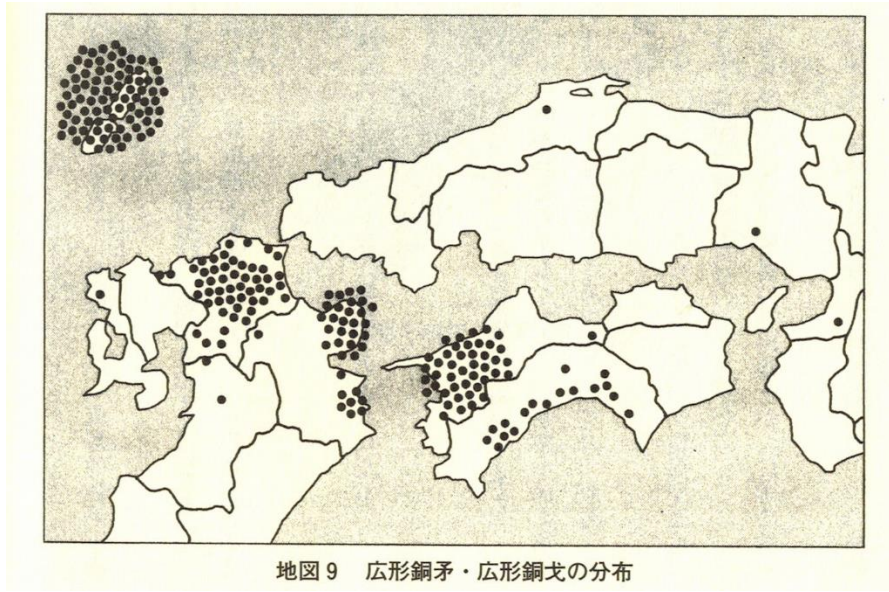
近傍の赤井手遺跡(春日市弥生)や弥永原遺跡(福岡市南区日佐)からはガラス勾玉の鑄型や鉄器なども出土している。

覇権が奴国から邪馬台国へ移った 3 世紀においても、テクノセンターとしての機能に変化は訪れていないようにみえる。

春日地域で生産された祭祀用の広形銅矛などは、海を越えて対馬や四国に流通している。

邪馬台国が奴国の技術力をうまく利用しながら、広域的な流通・支配体制を構築していったことをしめしている。





地図9 広形銅矛・広形銅戈の分布

一方で、奴国の政治的ノウハウと人材は、邪馬台国の支配機構にも継承され、政治・軍事・外交・祭祀などのさまざまな分野に継承され、邪馬台国発展の大きな原動力になったであろう。

とはいえ、帯方郡の使者たちにとっては、奴国は邪馬台国へ至る通過点に過ぎない。

邪馬台国によって、奴国には長官の兕馬觚(しまこ)と副官の卑奴母離が配置されていた。

邪馬台	投馬	不弥	奴	伊都	末盧	一支	對馬	国名
伊支馬	弥弥	多模	兕馬觚	爾支		卑狗	卑狗	官名
弥馬升	弥弥那利	卑奴母離	卑奴母離	柄泄渠護觚觚		卑奴母離	卑奴母離	
弥馬獲支								
奴佳靱				一大率				

兕馬觚(しまこ)は、その名のとおり、島日子(彦)として、博多湾沿岸部や志賀島、能古島などの海人族を所管する権限も付与されていたであろう。

いずれにしても、「二万余戸」という大きな人口とテクノラート集団を擁する先進的なクニである。

帯方郡の使者たちは、奴国の長官や副官および役人、女たちの盛大な接待を受けた後、途中青銅器工房を視察したりしながら、ゆっくりと不弥国(宇美)に向かって進んでいったにちがいない。

(次号につづく)

## 河村哲夫(かわむら・てつお)

1947年(昭和22)年福岡県柳川市生まれ。  
九州大学法学部卒  
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長  
福岡県文化団体連合会顧問  
ふくおかアジア文化塾代表  
立花壱岐研究会会員  
元『季刊邪馬台国』編纂委員長  
西日本新聞 TNC 文化サークル講師  
朝日カルチャーセンター講師  
大野城市山城塾講師



### 〈おもな著作〉

- 『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全5巻)』(1995年海鳥社)  
「小楠と立花壱岐」(1998年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)  
『立花宗茂』(1999年、西日本新聞社)  
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999年角川書店)  
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001年西日本新聞社)  
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003年海鳥社)  
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)  
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年11月梓書院)  
「北部九州における神功皇后伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』97号、98号)  
「九州における景行天皇伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』99号)  
「『季刊邪馬台国』100号への軌跡」(2008年、『季刊邪馬台国』100号)  
「小楠と立花壱岐」(2009年11月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)  
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010年3月海鳥社)  
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011年1月、『環』藤原書店)  
『天草の豪商石本平兵衛』(2012年8月藤原書店)  
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013年12月原書房)  
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014年6月原書房)  
『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016年『季刊邪馬台国』114号～124号に連載)

### (テレビ・ラジオ出演)

- 平成31年1月NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」  
平成28年よりRKBラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演